毎月一回十五日發行（定價一部五錢一年郵稅共五十錢）

編輯兼發行人　加美好男

長野縣上田市
發行所　上田蠶絲專門學校同窓會出版部

長野縣南市町
印刷所　信濃毎日新聞印刷部

千曲時報

蠶糸業教育の一端を論ず

製絲業者を初めとして我蠶絲業者の全般が國家の救濟を待つのみにして自ら內に努めんとする誠意の乏しい事は、今や漸く全國民の誹謗とならんとして居る。

古き歷史を有し殊に國脈をつなぐ最重要の輸出品として永年重要視されて來て國立の蠶絲業關係の試驗、研究所は夙に設立せられ各府縣に迄獨自の試驗場を有して居る狀態である。之れが從事員たる人物の養成にも中等程度の蠶絲業學校が多數にあり講習所、傳習所等も多數設立されており專門教育の爲には國立の學校が四つもある。年々歲々此等の學校から出て行く諸君が如何の程度に我蠶絲業の爲に努力して居るかを考へて見たい。勿論其等の多くは孜々として働いて居られる。然るに其結果たる我蠶絲業の發達が他の產業分科に比較して大變な遲速度である事は一驚も二驚もせねばならぬ所である。此結果から推論すると孜々努むる諸士の努力は全く徒勞に近いものではなからうか。

筆者は嘗て二三の外人から「日本人の團体の指導者は大變其指導者たるの能力に欠げて居るが之れに從ふ團員の優良である事は世界に類なきものである。例へば工場にしろ官廳にしろ到る所で所謂長官とか上級官と云ふものと職工や下級官との能力智識（其方面の專門の）の差が余り大でない。其上に古來よりの國民性として大變從順であるが爲に上長の誤れる又は不利なる指揮にも默々として之れ從つて行く。其結果は國家と云ふ大きな目から見れば多人數が過誤に陷つて居るのであるから大變な損害を受けて居る理となる。此點に日本人は余りにも無關心である」と云ふ樣な日本人觀を聞かされた。

茲に深く考へねばならぬ事は上長の位置にある諸士である。十分に考へを練つて國家の損失とならない樣に一般を導いて貰はねばならない。多數の人間の努力を試驗的に使ふ事は國家の大損失である。十分に智識技能の圓熟した所謂斯道の達人のみが始めて上長となり得るものである。今日の我蠶絲界を眺めて果して其適當を得て居るやを考へて見たい。

各自專門の修學した事業に從事する確固なる決心ある人々を養成するのが我實業學校の現時の目的である。然るに甚だ奇怪なる結果は到る所にさらけ出されて居る。各學校卒業者の現職を見れば此事が肯かれるであらう。殊に高い教育を受けたもの程眞に實業に從事するものが甚だ少い。筆者は茲に各自が修めた學科で月給を戴く徒輩を實業從事者とは看做し兼ねる事を一言して置かねばならぬ。月給生活者は――農工商に分れた職業と云ふ立場から見て甚だ曖昧朦朧たる人種であるからである。

何故に斯ゝる結果に來つたか。筆者は其原因の一端を此等卒業生を送り出した教員諸士の責に置くものである。各自が職を食む學校の職業種に關する智識技能が甚だ乏しい先生達が甚だ多い。口先丈けで他人の受賣りをする事は出來るが實行は殆んど出來ない先生達が多い。此等の所謂先生徒輩が其專門の事業の趨勢なんかを知らう筈がない。斯の如き先生に訓育されて出て來た卒業生の多くが優秀者であらうとも考へられない結果になる。眞に蠶絲業の各專門分科に通曉した智識技能を有する專門教員が何人あるか。

思ふて茲に到る時我蠶絲業の不振も宜なる哉と云はざるを得ぬ。許された原稿紙に限りがあつて筆者は其云はんとする所の極めて一部分しか書けなかつた事が殘念である。

世の蠶絲業教育に從事せる諸先生達の猛省を茲に促して擱筆する。

朝鮮の繭（三）

第五章　取引狀況

第一節　取引

（一）販賣高　朝鮮產繭の養蠶家により販賣せらるゝ高は產繭高の增進に伴ひ比年增進しつゝありて昭和三年に於ける販賣高は二六六千余石に達し同年繭產額の六割九分に當れり。之等は養蠶家が個々に販賣する所謂個人販賣と郡蠶業組合又は郡農會の斡旋により行はれる共同販賣とによりて販賣せらる。而して大正十四年に於ける兩者の販賣數量は個人販賣に於て三二千余石、共同販賣に於て二三三千余石を算し既往の實績に比し著しき增進を示せり。殊に共同販賣に於て共增進は顯著なり。左に最近十年の實績を示さむ。

年次	販賣價格 共同販賣	販賣價格 個人販賣	販賣價格 計	販賣數量 共同販賣	販賣數量 個人販賣	販賣數量 計	生產高ニ對スル販賣高割合
	円	円	円	石	石	石	
大正八年	四、三〇〇、五一七	二、六七一、六九八	六、九七二、二一五	四七、〇〇五	三〇、六三五	七七、六四〇	〇、六三五
九年	一、九五三、四〇三	一、一三八、一六八	三、〇九一、五七一	三三、三四八	二〇、九三五	五四、二八三	〇、四〇八
十年	二、一二〇、四三六	一、一〇八、九六三	三、二二九、三九八	四〇、六九八	二三、四四九	六四、一四七	〇、四八〇
十一年	四、二九五、一〇三	一、四六五、八三三	五、七六〇、九三六	五六、九七五	二〇、四四九	七七、四二四	〇、五四三
十二年	七、五三八、四四四	二、一五〇、四二五	九、六八八、八六九	一〇三、五三一	三一、七五六	一三五、二八七	〇、六四七
十三年	五、五八二、三四九	二、一七八、四四三	七、七六〇、七九二	一一三、八五九	四二、三二一	一五六、一八〇	〇、六三六
十四年	一一、四八一、五八八	四、三四〇、九二七	一五、八二二、五一五	一九五、五一三	三六、七七七	二三二、二九〇	〇、七四四
昭和元年	一一、一四五、七二九	二、六〇二、二四三	一三、七四七、九七二	一八三、四三六	四四、二九五	二二七、七三一	〇、七一八
二年	八、七五〇、六五九	一、二三五、二六七	九、九八五、九二六	二一一、六九三	三〇、六五六	二四二、三四九	〇、六三六
三年	九、八一五、五五五	一、三二七、五三六	一一、一四三、〇九一	二三四、四七四	三一、八五五	二六六、三二九	〇、六九〇
最近三年平均販賣方法別割合	八六二‰	一三八‰	一、〇〇〇‰	八六六‰	一三四‰	一、〇〇〇‰	―

（二）販賣方法　養蠶家の收繭販賣は既述の如く個人販賣によるものと共同販賣によるものとあり。

イ、個人販賣は主として交通便利なる市街地附近の產品又は共同販賣期節外に於ける繭の販賣に認めらるゝ所にして其買取人は道知事の認可を受け店舖を構へ其店舖に於てのみ繭の買取をなし得るものとし繭商人の農家に出張して買取ることは嚴禁せらるゝ所大部分なり。本取引は京畿道、慶尙北道、平安南道等に稍ゝ盛にして之等地方には有力仲買人の買取に從事するもありて買纏められたるものには大口取引の料とせらるゝものあるも其他の諸道に取引量少なく從て有力商人筋の直接之に當るものは稀にして自家用製糸原料、製紬製眞綿原料及地方小製糸家の原料繭等を買付くる程度にして大手筋の買取は大低共同販賣によれり。

ロ、共同販賣　繭の共同販賣は朝鮮總督府の極力奬勵しつゝある所にして朝鮮現在の養蠶狀態に於ては賣買

兩者に眞に有利なる施設たるなり。卽本施設は戶當產額の小量なる結果動もすれば販賣上に不利を招くの恐れある養蠶家を擁護し大量取引の利益を享受せしむると共に商人の爲には纏りたる數量の買取を容易にし勞せずして大口取引をなし得る便宜を供するものなり。

共同販賣は道の監督の下に郡農會及郡養蠶組合によりて行はる。而して郡農會長又は郡養蠶業組合長は主として郡守之に任し郡の技術員は組合又は農會の技術員を兼務又は囑託し地方によりては專任の技術員を置くもありて之等職員により專ら斡旋さる。其販賣所は主として郡廳所在地又は繭集中地の乾繭場、同繭取扱所にて行はるゝを普通とし郡廳、面事務所の如き場所其他公共團体の建物等を之に充つることあり。共同販賣の方法は現物販賣、入札豫約販賣及指定豫約販賣の三種に分たる。

現物販賣　販賣は道によりて盡力され道は販賣に先たち繭の出廻場所販賣期間及出廻豫定數量、繭購入心得等を一般購繭者に告知すると同時に養蠶家に對しても一定したる販賣期間に指定したる場所に可成生繭にて持寄らしむることに手配す。斯くして愈々共同販賣開始するに至れば養蠶家が販賣所に般入し來る繭は受付係にて受付搬入者の住所、氏名、數量を帳簿及傳票に記載し之を鑑定係に送り、鑑定係は品質を鑑定し特等、一等、二等、三等、四等、等外屑繭及玉繭に分類し之を當該傳票に記載して量定係に送り、量定係は乾繭、生繭の別に從ひ夫々區分し生繭は重量、乾繭は容量にて量定す。此場合生繭一升は交雜種春蠶八五匁、秋蠶八〇匁、又昔百匁、白龍九〇匁（道により多少異なることあり）として計算し容量の量定方法は乾繭一斗以上の場合は圓桝を用ひ中手入打三回縱一粒乘（繭が萬遍なく桝に入る樣三回平手にて輕く叩き桝の緣より上へ繭を縱に一粒宛並べ所謂山を掛けて量るなり）、一斗未滿の場合は五升桝を用ひ中手入打三回橫一粒乘繭一粒宛を橫に竝ふたけ山を掛ける）、五升未滿の場合は橫半粒乘を標準として量定し之を夫々傳票に記入して計算係に送る。

以上の如くして等級別に相等額の繭の集積するを待ち斡旋者は其時の生糸相場（朝鮮總督府より繭の販賣時期には糸況を打電す）生糸生產費其他相場の氣配、繭の出來榮等を考慮して標準繭（糸量十匁見當のもの卽二等繭）に對する豫定價格を算出し置き、買取の爲出場したる購繭者に等級別に分類したる現品を示して其標準繭（二等繭）に對して競爭入札を爲さしむ。此入札價格が斡旋者の算出せる豫定價格に同等なるか若くは豫定價格より高價なる時其最高入札者に落札せしめ若し入札價格が豫定價格に達せざる時は再入札をなさしむ。斯くて尙豫定價格に達せざる時は豫定價格に最も近き入札者と協定して價格を決定す。價格決定する時は入札に付せる全數量に對する取引成立したるものとし買取人は直に現金を支拂ひ繭を引取るべきものとす。

されば本販賣方法による繭を購買せむとするものは初め道により發表せられたる出廻豫定數量によりて豫め某地にては幾何位の繭を買取らむとの計劃を立て之に對する繭代金、繭袋等を準備し置く必要あり。買取生繭の乾燥に就ては蠶業組合又は農會によりて設備せられたる乾繭器使用の便宜を供せられる其場合には使用料として石に付一圓乃至二圓位を支拂ふべきものとす。此外一部地方に於ける一定時期の出廻繭全部を買受くる次第故之に相當する繭代金を携帶し受渡場所に自身出張するか又代理人を派出して現物取引と同樣の方法により組合又は農會關係技術員の査定したる等級並に數量に應じ契約に基き算出せる繭代金其他の手數料を支拂ひ取引を了するものとす尙日々の繭相場の算出其他は次に掲ぐる指定豫約販賣と同樣なり。

指定豫約販賣　本販賣方法は郡農會又は郡蠶業組合が買取人を指定して一定地の出廻繭を一手に買取らしむるものにして買取人の指定販賣價格の算定及受渡方法に就ては道農會長（又は道知事）郡農會（又は郡蠶業組合）の委任を受けて折衝に當り一定の條件を指示して買取人をして之に依らしめ指定販賣所に持込まるべき繭全部を買取らしむるものにして指定條件は道により又年により多少異なるも詮する所大同小異なり。本販賣方法は現在最も廣く行はれ昭和三年度に於ける共同販賣數量の殆んど全部がこの方法により取引せられ地方によりては此の方法にて道內全部の產繭を販賣せるものすらあり養蠶家と購繭者（主として鮮內製糸業者）との關係を密接ならしめ生產繭販賣の安定を期するに効果ありとせられ特に公平なる繭價を以て取引せらるゝを共特色とす次に本取引の指定條件其他の參考として昭和四年春繭の販賣に當り京畿道に實施されたるものを揭記せむ。

指定豫約販賣に關する（昭和四年京畿道ニ實施）る指定條件の例

繭買受人に對する指定條件

第一條　指定繭買受人ハ郡農會ノ共同販賣ニ付スル蠶繭全部ヲ本條件第四條ニ定ムル方法ニ據リ算出スル價格ヲ以テ卽日現金ニテ買收スヘキモノトス

共同販賣中本人又ハ其ノ代理人ハ必ス販賣所ニ詰メ居ルコトヲ要ス

第二條　共同販賣ニ付スヘキ繭ハ之ヲ左表ニ示ス査定標準ニ據リ十一等級ニ區分ス

但シ見込ハ生繭百匁ヲ基本トナシ査定ヲ行フ

等級	査定標準
特等	糸量十二匁見當
一等	同十一匁見當
二等	同十匁見當
三等	同九匁見當
四等	同八匁見當
五等	同七匁見當
中等	精繭ニ入ラサルモノ
上屑繭	中繭以下ニシテ良好ナルモノ
下屑繭	上屑繭ニ入ラサルモノ
上玉繭	色澤鮮麗ニシテ繭形整ヒ玉糸原料ニ適スモノ
下玉繭	上玉繭ニ入ラサルモノ

第三條　繭ノ等級査定ハ郡農會之ヲ行フ

第四條　指定繭買受人ノ買收スヘキ繭ノ價格ハ左ノ方法ニヨリ算出ス

等級／取引別	重量取引ノ場合	容量取引ノ場合
特等繭	掛値ニ十二ヲ乘シタル積	上記價格ノ八割五分
一等繭	同　十一　同	同
二等繭	同　十　同	同
三等繭	同　九　同	同
四等繭	同　八　同	同
五等繭	同　七　同	同
中繭	五等繭ト上屑繭トノ價格ヲ平均シタル額	同
上屑繭	二等繭價格ノ二割五分	同
下屑繭	同　一割二分	同
上玉繭	同　二割八分	上記ト同一
下玉繭	同　一割五分	同

但シ掛値ハ朝鮮總督府殖産局ヨリ發シタル生糸相場當限及先限ヲ合算シ之ヲ二分シタル額ヨリ繭値基ヲ減シ其ノ殘數ヲ十六ニテ除シテ得タル數

註　$掛値＝\dfrac{\dfrac{清算市場當物糸價十同先物糸價}{2}-繭値基}{16}$

第五條　指定繭買受人ハ左ノ料金ヲ郡農會ニ納付ス可シ

（イ）繭買人ハ斡旋手數料トシテ買入繭總價格ノ百分ノ二ニ相當スル金額

（ロ）乾繭場使用料トシテ繭十貫ニ付金一圓八十錢

（ハ）乾繭場ヲ使用セザル所ニテハ繭取扱場使用料トシテ繭十貫匁ニ付金一圓五十錢

第六條　繭ノ受渡ハ生繭ハ重量ニ依リ、乾繭ハ容量ニ依リ行フモノトス但シ其ノ方法ハ本府ノ示セル標準ニ據ル

第七條　指定繭買受人ハ繭販賣開始後向フ五日間ニ於ケル繭出廻見込數量ニ對スル購繭資金ヲ郡農會長ニ供託スルコト爾後之ニ慣ヒ郡農會長ヨリ要求アル毎ニ其ノ金額ヲ供託スルモノトス

第八條　繭ノ賣買契約ハ郡農會長及

ヲ以テシ前記生糸相場ノ平均ニ三十二圓ノ高低ヲ生スル毎ニ貳掛宛增減セシムルモノトス

指定繭買受人間ニ於テ直接締結スルモノトス

第九條　指定繭買受人ハ繭取引開始前保證金トシテ買入豫定數量ニ對シ十貫匁ニ付金三圓ノ割ヲ以テ現金若シクハ證券ヲ道農會ニ提供スルコト但シ保證金ハ繭取引終了ト同時ニ返還スルモノトス

第十條　指定繭買受人ハ指定ヲ受ケタル日ヨリ二日以内ニ指定ヲ承諾セル旨ノ請書ヲ提出スルコト

契約書

昭和　年春（秋）蠶繭賣買ニ關シ京畿道　郡農會長ヲ甲トシ指定買受人（住所氏名）ヲ乙トシ京畿道農會長ノ指定條件ニ依ルノ外左ノ條項ヲ契約ス

本契約ノ締結ヲ證スル爲本證書貳通ヲ作製シ記名調印ノ上各自其ノ一通ヲ所持スルモノトス

年　月　日

郡農會長

指定買受人

第一條　乙ハ昭和　年　月　日ヨリ　月　日迄ニ甲ニ於テ受付タル蠶繭ヲ本契約ニ依リ買受クルモノトス

第二條　各販賣所ニ於テ乙ノ買受クヘキ蠶繭ノ容器ハ乙ニ於テ持參スルモノトス

第三條　繭ノ量及等級ノ査定ニ異議アルトキハ乙ハ其ノ改定ヲ京畿道知事ニ申請スルコトヲ得前項ニ對スル道知事ノ査定ニ對シテハ異議ヲ述フルコトヲ得ズ

第四條　前條ノ場合其ノ受入タル蠶繭ニ對シテハ知事ノ査定ヲ受クル迄ハ甲ノ決スルトコロニ依リ其ノ賣買ヲ進行スルモノトス

第五條　乙ハ其ノ代理人ヲ差出ス場合ハ代理人タルコトヲ證スル書面ヲ攜帶セシムヘシ但シ甲ニ於テ販賣上必要アリト認メタルトキハ乙ニ對シ使用人ノ増員ヲ請求スルコトアルヘシ

第六條　甲ニ於テ乙ノ代理人又ハ使用人ノ行爲穩當ナラスト認メタルトキハ之ヲ變更セシムルコトアルヘシ

第七條　本契約ニ付疑義ヲ生シタル場合ハ總テ京畿道知事ノ決定スルトコロニ從フモノトス

第八條　乙ニ於テ本契約ヲ履行セサルトキハ甲ハ乙ニ於テ道農會ニ供託シタル保證金ノ一部又ハ全部ヲ徴收スルコトアルヘシ

第九條　本契約期間ハ昭和　年　月　日限トス

（三）道別販賣狀況　販賣數量は交通の便否、販賣の方法、價格の高低、地方消費量の多少等に關係する所多きも結局産額多き地方販賣量多く慶尚北道、金羅南道、江原道、忠清南道、京畿道等の諸道に多し。次に各道別に個人及共同の兩販賣狀況を見るに共同販賣は各道に普遍的に行はれ個人販賣は慶尚北道、京畿道、平安南道等に盛なり。蓋し個人販賣の盛に行はるゝ之等の諸道には大邱、平壤、京城の如き繁華なる市街地ありて此處には早くより店舗を構へ繭の仲買を爲すを業とする者あり（平壤の如き共數六百を算すと報ぜらる）たると共に地方民は其産繭を態々共同販賣所に持出すの要なく出市の序を以て容易に販賣し得るにより今尚斯く個人販賣の行はるゝ次第なり。道別販賣狀況左の如し。

繭販賣數量道別表（昭和三年）

	共同販賣				個人販賣				販賣量	販賣量
	精繭	屑繭	玉繭	合計	精繭	屑繭	玉繭	合計	總計	道別割合
	石	石	石	石	石	石	石	石	石	
京畿道	一三、〇二〇	四三三	四九四	一三、九四七	六、一二一	五六一	五六五	七、二四七	二一、一九四	八〇
忠清北道	一七、三四五	七七八	六四七	一八、七七〇	一、七七七	一二九	九七	二、〇〇三	二〇、七七三	七八
忠清南道	一一、三〇一	一、五六三	一、二四〇	一四、一〇四	四三〇	一〇八	五六	五九四	一四、六九八	五三
金羅北道	一五、三七〇	八〇七	七三一	一六、九〇八	一、一〇四	六八	五八	一、二三〇	一八、一三八	六八
金羅南道	二五、六六一	一、〇八三	七七一	二七、五一五	一、〇〇四	二四	三四	一、〇六二	二八、五七七	一〇七
慶尚北道	三七、〇九八	一三三	三八一	三七、六一二	九、三五七	二七九	二一二	九、八四八	四七、四六〇	一七八
慶尚南道	七、二七二	二三八	四九九	八、〇〇九	二、四七〇	一八七	一八七	二、八四四	一〇、八五三	四一
黄海道	一〇、〇六八	二一九	二五四	一〇、五四一	八六八	二七	三四	九二九	一一、四七〇	四三
平安南道	一一、六七八	五九	四三	一一、七八〇	四、九三六	二七〇	一九〇	五、三九六	一七、一七六	六四
平安北道	一四、四七五	五二四	五五八	一五、五五七	九二四	四〇	五二	一、〇一六	一六、五七三	六三
江原道	二六、〇五一	一、〇四〇	一、一二八	二八、二一九	二六一	—	—	二六一	二八、四八〇	一〇七
咸鏡南道	一九、三三八	三〇〇	一一四	一九、七五二	三七八	一〇	八	三九六	二〇、一四八	七六
咸鏡北道	六七九	五	六	六九〇	—	—	—	—	六九〇	三
計	二一九、四八七	七、二七〇	六、七一七	二三三、四七四	二九、五五九	一、六九三	三、八五五	三二、八五五	二六六、三二九	一、〇〇〇

松村氏近信一束

一、伯林より同窓會宛

秋近き頃御元氣の御事と存じますシベリヤの旅も無事に終て豫定通り昨二十六日伯林市の人となりました。伊太利よりは旅館と無賃鐵道旅行券（多分然らん、伊太利語にて甚だ閉口致して居ます。）とが書留で小生宛來まして今朝受取りました。余程外國客を此度の會では優遇して與れるらしいですが、旅なれぬ小生には効果が問題であります。當地三日滯在、三十日夜伊太利出發の豫定です、佐藤さんの下宿に御厄介になりました。原田先生の勉强せられた部屋も女中の案内で拜見しました。佐藤さんは今獨逸語を熱心に御勉强です。未だ獨逸の町も余り知られ無い位に、小生は昨日フリイドリッヒ街に到着しましたから、此町に近い

有名なウンテルデン。リンデンに行き、夫より森の夕を散策してリンデンの木柄に落ち行く秋の夕日を心行く迄眺めました。

西と東と物云ふ人の顔の色、さては毛の色、眼の色は變つても、物云はぬ自然の景色を變りなき處に、詩と歌の共通性があるのでありますよう。

朝寒やシベリヤ乙女素足にて
秋風やシベリヤの原の一軒家
リンデンの森靜かなり秋の暮
秋風や獨逸の空をツエツペリン
秋草やシベリヤ走る急行車
西瓜買ふ旅客ありけりマンチュリア
虫啼くやシベリヤ走る寢台車
バイカル湖秋の入日の映ゆる哉
苺賣るシベリヤ乙女素足して
モスクアの河に浴す勞働者
秋月に吹かれてかける雪鳥かな
旅の子は物なれぬ旅に詩情動かす、凝固の狀態であります。ロンパルヂアの平原の秋色は、日東の男の子の旅情を如何に動ずるや。

各位の御健康を祈ります。

八月二十七日　伯林の旅館にて　松村季美

二、伯林より針塚先生宛

拜啓　初秋の候益々御清祥の御事と賀上候、不肖十三日出發以來シベリヤ鐵道を旅する事七日にて別れ、ポーランドを經て昨二十六日午前九時伯林到着仕候間乍他事御放念賜り度く。

早速ウイゲート、イツヒメヒテを以て洋食一皿茶一杯の晝食を濟ませ申候　シベリヤ鐵道は手眞似を以て主として通過致し、タンシチューがあるや否やを尋ね候處解らず致方なく舌を出し後に頭に兩手にて角を作りて「牛の舌」を示し候以て始めて解り笑ひ乍らナインと返事せるは一興にて候ひしき。

解らぬ所は此の手眞似にて噺の旅行を續くるも面白き事と存候　三日間當地滯在三十日に伊太利行の豫定に候　旅行券や、旅宿各等學會より通知有之候も伊語にて不明の個所多く是は手眞似にて尋ぬる事も出來間敷滯稽多き事に今より思居申候

佐藤先生は御元氣にて獨逸語專念御勉强の由にて候　伯林市の氣分と、モスコー市の氣分とは所謂天地の差と思はれ申候

ロシア管見物すも一興と存候も不肖の觸る可き所にても申はねば、何れ歸國後の御物語に致度存候

右御高配に對する御禮旁々近況御報告申上度如斯に有之候　亂筆御免被下度候

八月二十七日　伯林にて　松村季美

敬具

三、伊太利パドヴアより　同窓會宛

（萬國動物學會議の模樣）

拜啓故山は既に馬肥ゆる頃と存候皆々樣には長期の育蠶にて嘸苦勞被遊候事と相察仕候扨て不肖今回歐米出張の第一使命なる萬國動物學會出席の模樣漸く十一日を以て無事終了仕候まゝ會の內容概略御報申上ぐ可く候

記

一、會期　一九三〇年九月四日より同月十一日迄八日間

二、會場　伊太利パドヴア市大學內

三、會員　全世界動物學研究者、會費百リラ（約拾二圓）を支拂ひ申込を爲したるもの

四、常任委員

委員長　佛國パリ　デュウバン氏

書記長　同　カウレリー氏

委員　伊太利パドヴア　エンリーク氏
獨逸ミュンヘン　ヘルトウイツヒ氏
ハンガリー、ブダペスト　ホルヴアス氏
スエーデン、ストツクホルム　レーンベルグ氏
ベルギー、ブルツセル　ペルセネーア氏
米國ワシントン　スチイネジヤー氏
同　スタイル氏

五、本會々長　伊太利パドヴア　エンリーク氏

六、會內容

イ、特別講演　ロ、分科會　ハ、見學其他

七、會の次第

九月四日

一、午前九時三十分各國代表者集會。同十時三十分開會式文部大臣レツコ氏臨席、會長の挨拶、各國代表の挨拶あり、次で副會長、書記、分科會の座長の選擧あり。次でコーレリー教授の特別講演「遺傳と進化」あり。

一、午后分科會

一般動物學、實驗動物學、原生動物學　比較解剖學　夜會（茶話會）

九月五日

午前九時分科會

實驗動物學、動物地理學、無背推動物學、比較生理學

午後三時特別講演

プチブラム氏、デヤンネル氏、コロシイ氏、ユスト氏

午後八時三十分、活動寫眞應用說明、ブランド氏＝オランダウータンの研究、トルク氏＝水棲動物の運動に就て

九月六日

午前九時特別講演

ハルトマン氏

午後三時分科會

一般動物學、比較生理學、昆虫學

午後五時パドヴア市より招待會

九月七日

午前八時ベニス灣清遊、午後十一時歸る。汽船はベニス市にて接待す。

九月八日

午前十時特別講演

リツドル氏、ベルレツツ氏

午後三時分科會

實驗動物學、比較解剖學、養蠶學

午後十時より招待舞踏會有り。

九月九日

午前十時分科會

一般動物學、動物地理學、比較解剖學、寄生虫學

午後二時自動車（乘合大型）拾數台にてアヴアノ町養鳥試驗場視察

午後七時アヴアノ町に農務大臣招待會

九月十日

午前九時特別講演

セウエルトツオツフ氏、ゼレニー氏、シヤトン氏

午後三時分科會

實驗動物學、背推動物學、比較生理學、寄生虫學、

午後六時蠶業試驗場視察

午後九時人形芝居觀覽

九月十一日午前九時特別講演

シユミツド氏　ユツチ氏

午後三時閉會式＝常任委員選擧其他

午後七時三十分晩餐會、十一時解散

附　出席會員約五百名（夫人、令息　令孃を含む）

以上の如き順序にて遂行せられ候

養蠶學部會の報告には

ピゴリニー氏（パドヴア蠶業試驗場長）

トノン孃（同　場員）

エンリーク氏（本會々長）

小生

ユツテ氏（サツカリ大學教授）

オンガロー氏（パドヴア試驗場員）

の六名にて內ピゴリニー氏、トノン孃、小生、ユツチ氏は演題を各二つ揚げありしも小生とトノン孃のみ二つの發表を致し他の人々は時間の部合上一つのみに致し候

ピゴリニー氏＝蠶卵に對する生理的研究

トノン氏＝胚子の發生に關する研究

エンリーク氏＝養蠶と遺傳學

ユツチ氏＝繭色を異にせる品種及共交雜種の血液に就ての研究

オンガロー氏＝蠶の呼吸に關する研究

小生＝室頭病の主原因に就て家蠶の或種酵素作用の生物化學的並遺傳學的研究

トノン氏＝卵色を異にせる二品種に

る二品種に就ての實驗と云ふ様な內容の發表にて一人約二十分にて候小生の英語は甚難解らしき様子なりしも持參致したる表を掲げて說明致し候爲め相當了解し吳れし人あるやに認め候　空頭病に就ては當國の大家が細菌說を過信せる際とて甚不思議がり自分も實驗して見ん等云ふ學者も有之多少異論ある學者の顏も見え候も注意を曳きしと見えミランの知らぬ方より來信あり是非當地來訪あり度く種々尋ね度し等佛文にて通信あり面喰ひ居候

第二の酵素發表に就ては米國のリッドル博士もカタラーゼに就て性のメタボリズムの研究をせられ居る際とて其興味ある實驗なれば此後續行して成績を收めん事を希望すと解り易き英語にて激勵被下候　アスコリ蠶業試驗場長アリア氏もアミラーゼに就て歐洲種には今迄認め難かりしも小生の實驗は主として日本種に就てなれば（歐洲種を澤山行ひし事を說明したるも了解を充分せられざりしやも知れず）此後の實驗を確めんと云はれ候へば日本種の（十）の品種を分與すべきを約し候。其他二、三の人より激勵の言葉を受け候　恐らく數千里の離れ小嶋より日本の蠶業の研究の一部をばファシストの國迄紹介に參りたる其點に對する好意の表現に候ふべきも各位より無上の御好意と御指導とを受けし賜と感謝致す次第に候

何れの會にも醜き揚足とりの様なる態度を表はすが如き事無く全く紳士的にして整理せられたる共問又は自己の研究との差異等を發表する様子は心持よく覺え申候室內は非常に打とけたる態度にて發表する人も座談でもする様な考にて行ふ様に見受け候大家小家の區別なく平民的の交際を見るのも亦心持よく覺ゆる一つにて候

啞の旅行は啞の旅行なりに得る事も有之と存し自重自任、日なほ視察に多きを有する身輕々に決して振舞はぬ覺悟に候も時々滑稽を演じ居り候

之より北伊太利を振出しに南伊太利に參り次で南佛の蠶糸業視察の豫定にて旅行を遂行する計劃に候

伊太利の空紺碧に晴るゝ日多く名月の波に浮ぶ景色も信山の夾れに似通ふもの有之候

九月と雖もなほ暑き日の續く事にて候もポプラの並木渡る風、朝まだき飛交ふ雲に秋來ぬとも知らぬ程にて候

伊太利に於ける學會の模様亂筆ながら概略御報申上て御機嫌伺ひに代ふる次第にて候

一九三〇・九月十二日夜

旅宿孤燈影暗きにて「松村季美拜」

談話會記事（二）

（物質下降路としての木質部の續き）

（B）下昇路としての證據

單に色素が下降すると云ふに止まる實驗である。Hirschfeld (1920) 然し之れは學會に意外の反響を起して Dixon は導管內物質下降說をたてた。然して之等に就いて考察するに（B）の下降說が單に色素が下降すると云ふとのみの事實から推して物質が下降すると云ふことは余り大膽過ぎると思はれる。何故ならば色素其のものは滲透性極めて强き故に何れの部分にも慘透するの性質あり、然るに前說のものの時は特に Mason 以下の實驗は輪切した以下は (Carbohydrate が全然增加しないと云ふのであるから之れより良い證明はない譯である。故に今日の所は未だ導管內物質下降說なるものは全然根據はないと云ふても過言ではないであらう。

(Botanical Magazine vol.43. No.509. P.277 中野氏論文)

柞蠶蛹の雌雄組成分に就て

三輪貞德

昭和三年第二化目の滿州產柞蠶蛹を同年十一月初旬殺蛹して雌雄に分け、蛋白質、炭水化物、脂油 Chitine 灰分種々の形態の窒素等の各成分を分析して見た。分析に供した蛹は雌一頭平均七・三四四一瓦、雄一頭平均四・八九七八瓦である。雌は蛋白質、其の他窒素化合物に於て非常に雄より多かつたが炭水化物ノ油脂は非常に少なく Chitine の灰分も少ない傾向があつた。

故に蛹より營養劑を作る場合は雌蛹を有利とし、石鹼製造の場合には雄蛹を有利とする。此の分析の結果は家蠶蛹の場合も異同様であつた。平塚博士の說によれば家蠶は炭水化物より大部分油脂物質を作ると云ふ。之れによれば雄蛹に炭水化物、油脂物質の多い事は考へられる。併し家蠶によれば炭水化物は化蛹時に大部分消費される故に以后は炭水化物は他の成分に比して必要ならざるものなり、されば、以后油脂物質に變るものなるか、蛋白質の雌蛹に多きは考へられることとなり、之の蛋白質により次代の卵を形成すべきなればなり。之要に柞蠶は蛹のまゝ越冬し家蠶は卵にて越冬するために成分等も自ら家蠶と異るべきなり。

蛙の雌雄同体

井澤喜三

蛙(Rana temporaria)に於ける雌雄同体二例、Specimen A.

外部に現はれたる第二次性徵は明かに雄なれども、尿生殖系を觀察するに睪丸及輸卵管の良く發達せる雌雄同体(Hermaphrodite)である。輸尿管は普通に發育し貯精囊に聯絡す、左側睪丸は前部に着色せる組織がある、右側睪丸には二つの着色があり之れは卵巢組織と考へられる。

Specimen B.

右側睪丸は形普通なれども小形、左側は前部は普通形なれども後部は大なる泡沫狀に膨大す。左側のみに体腔長位の長さの屈曲せざる輸卵管あり、Crew の說によると之れは雌の構造を有する個体が Sex reversal に依り雄に發育したものであつて其のために inter rexuality を示すと云ふ。尙前述の如き睪丸色素枕着組織は Sex reversal の末期に現はれる卵巢組織の遺物であると云ふ蛙の雌雄の細胞學的構造は未だ一定せず。性の決定に就ては色々の說がある、又之れに關して色々の例及實驗があるが之れを概括すると大体次の三說となる。

a. Sex chromosome theory.

b. Hormon theory.

c. Metabolic theory.

之の內 b. c. は a に關して New sex chromosome theory となす事が出來る。Morgan は之れを否定しておるが Hormaphroditism, Gynandro-morphism, Freemartine. 其の他實驗的事實に依ると必ずしも性染色体だけでは說明出來ない。之の二例等も之の事を暗示してるのではないか。

(The Amer, Naturalist. Vol. LXIII No685. 1929 P130—138 J.H. Sloyd.)

蠶兒の体長と鼓動數との關係

永井覺

一、昆虫の心臟鼓動の生理は、最近多くの學者によつて研究せられ、就中其の脉搏に及ぼす溫度、藥品種は蠶に於ては溫度、時日的變化に就ての業績が多い。尙又近年 Chironomus 幼虫の鼓動と体長との關係に就ての研究ありしを以て、之れが蠶に於ては如何であるかを研究した。又實際蠶の大小、雌雄、品種的にも齡的にも之の點は認め得られる。

二、初め蠶兒の Dorsal vessel を取出して之れを處定の長さに切斷し例へば(7—8segを中心として)一糎なら一糎に切斷し、其の際の鼓動數

を對一分にて測定した。其の結果○、二五糎より五糎の間に於て之の關係は其の Vessel の短かきもの程皷動數多く、長きものは少ない結果を得た又之れが實際飼育せられた蠶兒に於ては前實驗を裏書して、尙明かに

項目	平均價	標準偏差	變異係數	相關係數
体長m.m.	49.40±0.12	3.89±0.11	5.85±0.22	—
皷動數(對1分)	47.39±0.26	4.94±0.19	10.43±0.39	0.691±0.0275

三、以上の結果を曾て一九〇六年に Carlson が「カブトガニ」に就て行つた實驗（之れは心臟に分布する神經を分離することが出來る爲實驗的にも證明されて居る、幼い時はその分布少なきため脉搏が調節されないで其のため多いのであると！）と比較して考へると一致する點が多い。殊に解剖的に行はれし場合は中樞神經よりの調節神經の切斷又は之れが分布を少なくするので多くなると考へられる。然し之の問題は Dorsal vessel 其れ自体の形態學的並に生理學的にも亦神經生理學的にも今後の研究に俟たねばならない。

The Dimensions of Dividing Micro-organism

和田利彰

Lauge氏は分裂せる微生物は其の密度に變化がなく、同一部分に分裂し Mother cell の Volume の二分の一であると假定し微生物の大きさを立体幾何學的に考へ其の計算法を次の如く述べてゐる。

一、球狀の微生物

球の容積 $V=\frac{4\pi r^3}{3}$ ∴ Doughter cell, $V=\frac{4\pi r^3}{3}\times\frac{1}{2}$ Dia. of daug

liter cell = $\sqrt[3]{\frac{r^3}{2}}$

その他同じ球狀細菌科の中で gram negative diplocolli 及 hemolytic streptocolli の如き hemisphere に近き分裂をなすことは云ふ迄もないことである。

二、圓壔狀の微生物

圓圍壔 $V=\pi r^2XH$ Dia of daughtercell = $\sqrt{\frac{r^2}{2}}$

横分裂をなせる場合、或は縱裂して其の儘の形を保持してゐるものの Doughter cell の大きさは論ずるに及ばず。

三、直六面体の微生物

直六面体の容積は Three dimensions の product に等し。

四以上の三つの形の多少變形せるもの例へば圓筒狀のもの、一端が圓錐狀とか半圓形とかになつてるものは各々他の Factors によつて計算される。以上の如く微生物の大きさを立体幾何學的に考ふることは微生物の分裂の理論的可能性を論究する場合に記憶しておく必要がある。

蠶兒に寄生する線虫に就て

針塚民一

「所屬」 Mermithidae 科に屬するものであると思惟す、

「形態」 体色は一樣に乳白色にして、体の後方稍太き觀を呈し皮膚は透明にして消化管は体の中央を縱走す。前端に口を有し後端は圓くして末端に熊爪狀の無色の鉤を一本有す、而して往年採取せる「スキムシ」の線虫と比較すると、其の形態後者にありては二—三寸にして同じく乳白色を帶び其の尾端に蠶兒に具へたるものと同一の鉤一本を有するを認めたり、蠶兒の線虫と「スキムシ」の線虫とは体の大小に於て異なるも其の形態は外觀的同一である。而して大小を生ずるに至る原因は蠶兒に寄生せるものは一頭なるも「スキムシ」に寄生するものは何如其の寄生主は小なるにかゝわらず二—三頭以上の寄生するために勢ひ体に大小を生ぜしものならん。

「經過」 寄生の方法と經過は全く不明である。蟷螂に寄生する針金虫の幼虫は水中に於て先づ水産昆虫に寄生し再び蟷螂に喰はれて其の体内に寄生するものと認められるも蠶兒には「スキムシ」に寄生するものは何如なる經路を辿りて寄生するかは未だ明かならず。而して冬季桑園の土中に於て越冬する乳白色の線形虫と何等かの關係ありやと思はるる（壽命は一年三ケ月位）

「寄生蠶兒の解剖上の所見」 線虫は体腔内に存し胃中にはない、体腔中でも消食管を巡りて多く纏綿してゐる。五齢の初期は蛮頭蠶の如き微候を表はし、擧動不活發從つて發育も遲々たり、營養することを得ず、末期には外部から明瞭に見られる。「分布」 群馬、岐阜、兵庫、廣嶋、山梨、福嶋、三重、長野等の地方にあり。

「驅除豫防」 寄生せる蠶兒の擧動不活のものにて空頭蠶病狀を呈するのみならず線虫を透視し得るものを排除すべし。

背皮腺に就て

藤旗和人

一、位置 Hantingdrüsen は蠶兒の Subdosal line にありて Abdomen の第十二環節を除く各環節に一對宛あり。大なるものは0.5—0.2粍、小なるものは0.25—0.1粍である(五齢期)

二、Development Ectodermal origin のものにして數個の原細胞があり。内二個發育して後一細胞となり drüsen を形成するものである。同時に Ectomerm の invargination 起り drüsen の duct を形成す。

三、構造、楕圓形囊狀体で一個の glandcell と duct の部分よりなり、猶之を構成する部分に二個の細胞なるものあり、glandcell は分泌細胞にして Cytoplasm は發育時期により其の形狀を異にす、Moulting stage に於ては極めて多くの Vacuole を有し海綿狀組織を有し核は非常なる Lumicification をなす。

四、生理作用 脫皮と大なる關係を有し分泌液を新舊兩皮の間に分泌して脫皮を圓滑ならしむる作用をなす人によりては同時に排泄作用を司ると云ふ。分泌液の成分は蓚酸石灰成熟新化蛹時代に至れば尿酸も否まれておると云ふ。尙分泌液に就ては鮮かならず。

五、上蔟以后の變化 Hamling drusen は化蛹期に至れば當然變化し遂には消滅するものである其の變化は上蔟二日目頃より著しく核は糸狀となり金付泡狀粒の集まりし如き觀と呈す、六日目頃に至れば核目延長し泡体は顆る大陛となり溶解を初むに至る、七日目頃に至ると化蛹も進み遂には体腔中に落下し全く消滅する。

繭生糸の一新害虫「ノシメコクガ」に就て

小林貫一

「學名」 Pladia interpunctella Hubn.

「分科」 鱗翅目、螟蛾科

本害虫は上田蠶糸專門學校製糸部に於て生皮革、落繭繭、ビス、土俵等に發生加害せるものなり。

「成虫」 体長六—七粍、体褐色、前翅の前半灰白色、后半は銅色を呈す。

「卵」 長さ、〇、六粍、扁平楕円、乳白色。

「幼虫」 体長七粍内外、頭部褐色、胴部乳白色。

「蛹」 淡褐色、長楕圓形、繭は薄く灰白色。

「經過習性」 年四—五回發生、幼虫態で越年成虫は六月から十月頃迄は絶えず發生す。

「加害狀態」 幼虫は好んで蠶蛹繭及び生糸を食し繭、生皮革、屑糸、ビス、土俵等を自己の絹糸を以て綴り、其の中で生活する。

「驅除豫防」

一、繭及紡績原料は俵、筵、等に入れて放置せぬこと
二、貯藏場所の內部は周圍は大掃除を時々行ふ事
三、窓には金網を張ること
四、繭及紡績原料は充分に乾燥して鏈詰となし密閉し、其の中に「ナフタリン」樟腦を入れておくこと
五、貯藏場所は溫度の變化少く且低溫、通風、乾燥せる場所たること。
六、CS_2　CCl_2　$C_6H_4Cl_2$　Cl_3NO_2　にて燻蒸すること。

どんな研究を諸方でして居るか（其一）（昭和三年度）

大藏省資源局の調査の中から蠶絲業に關係のものを拔萃して諸賢の御目にかけます。

1　桑

1、栽　培

桑園の經營方法が桑樹の發育及桑葉生產に及ぼす經濟的關係に就ての研究（研究中）
　鹿兒島蠶試　山元顯義

桑園經營法の蠶兒、蠶繭、產卵に及ぼす影響試驗（研究中）
　和歌山蠶試　柏田和　白金保

三反步桑園經營法に關する研究（研究中）
　三重蠶試　坂口民夫　河合文太郎

荒廢桑園處理試驗（研究中）
　山口蠶試　桑園土質の相異と蠶兒との關係試驗（未着手）
　山口蠶試　夏秋蠶專用桑園に於て伐採株直時期を異にすることに依り桑樹の發育並收穫量に及ぼす關係（完了）
　奈良蠶試　岸本新一

犧牲桑園に關する研究（特に其の方法及株數粗密に關する研究）（研究中）
　三重蠶試　河合文太郎

樹內桑園と桑園並耕耘桑園と無耕耘桑園の桑葉が蠶兒に及ぼす關係試驗（研究中）
　佐瀨旭　鹿非英三

桑園の仕立法が蠶兒の發育並其の他に及ぼす關係（研究中）
　小野寺源吉　奈良蠶試

桑樹の仕立法に關する試驗（研究中）
　吉村眞作　大久保四郎　岩根謙

桑樹の仕立法に關する研究（研究中）
　相馬兵太　荻野輸閒

桑樹仕立法試驗（研究中）
　齋藤勇助　矢澤茂登一

桑の仕立方に關する試驗（未着手）
　城戶久一郎　古谷榮藏

桑樹の仕立法に關する研究（研究中）
　糟谷密　大八木實司

桑樹仕立法に關する研究（研究中）
　井川清市　島津勘助

桑園の仕立法を異にするとき其の收穫葉質に及ぼす影響の研究（研究中）
　齋藤圓藏　山形佳兒

桑品種仕立法及培養法の相違より起る葉質の差違と蠶兒の發育並葉質との關係（研究中）
　鹿兒島蠶試　山元顯義

桑葉の摘株回數が蠶作に及ぼす關係（未着手）
　早瀨喜一郎　齋藤勇助

桑樹の仕立法に關する研究（研究中）
　鹿兒島蠶試　安島峻

桑樹仕立法試驗（研究中）
　東京蠶試　齋藤勇助

接木法による桑園の試驗（研究中）
　富山蠶試　中谷政次郎

桑園內間作に關する研究（完了）
　高知蠶試　秋月育雄

桑樹間作經濟調查（研究中）
　朝鮮、模範場　荻野輸閒

桑山間作に關する研究（研究中）
　朝鮮模範場　荻野輸閒

桑園間作試驗（研究中）
　栃木蠶試　相馬兵太

桑園に於ける間作物の種類、栽培法に關する研究（研究中）
　群馬蠶試　吉村眞作　大久保四郎　岩根謙

桑樹凍害善後處理試驗（研究中）
　山梨蠶試　山形佳兒

桑樹の雪害豫防試驗（研究中）
　福井蠶試　有賀新藏

桑の仕立法試驗（研究中）
　神奈川蠶試　齋藤利助

桑の仕立方に關する研究（研究中）
　上田蠶絲　古谷榮藏

桑樹の仕立法に關する研究（研究中）
　關東蠶試　安島峻

桑樹仕立法試驗（研究中）
　東京蠶試　齋藤勇助

桑樹の仕立法が蠶兒の發育並其の他に及ぼす關係（研究中）
　奈良蠶試　早瀨喜一郎

桑樹仕立法並伐採期の差異が桑葉の飼料的價値に關する試驗（研究中）
　長野蠶試　鶴田定平　金崎眞英

桑樹栽培法（仕立法、採葉法、施肥）に關する研究（研究中）
　長野蠶試　鶴田定平　金崎眞英

桑樹仕立法試驗（研究中）
　山梨蠶試　籏野陸郎

桑の仕立法に關する試驗（研究中）
　石川蠶試　瀧島政衛　大島顯三

桑葉と其の剪定仕立法による桑葉との葉質比較試驗（研究中）
　郡是製糸理研　田代茂

桑樹の根刈仕立法と其の發育との關係に就ての研究（完了）
　鹿兒島蠶試　山元顯義

仕立法を異にせる桑葉と蠶兒發育との關係試驗（研究中）
　高知蠶試　大山末樹

桑樹添接に關する研究（完了）
　德島蠶試　島津勘助

桑の品種仕立方に關する研究（研究中）
　山口蠶試

桑園施肥試驗（研究中）
　福井蠶試　有賀新藏

自給肥料及金肥による桑葉の葉質比較試驗（研究中）
　郡是製糸理研　田代茂

桑園各肥料區に於ける土壤の理化學的性質と桑葉々質との關係（未着手）
　郡是製糸理研　奧正己

桑園施肥の寡多が收穫並蠶に及ぼす關係試驗（研究中）
　和歌山蠶試　柏田和　栗栖德之助

桑肥料の種類及施肥量と蠶の發育との關係に就ての研究（研究中）
　鹿兒島蠶試　山元顯義

窒素量及肥料三成分が桑の發育に及ぼす關係に就ての研究（研究中）
　鹿兒島蠶試　山元顯義

施肥料が桑樹の發育に及ぼす關係に就ての研究（完了）
　鹿兒島蠶試　山元顯義

春季施與せる速効性窒素肥料が桑樹の發育に及ぼす關係に就ての研究（完了）
　鹿兒島蠶試　山元顯義

肥料の種類が桑樹の發育に及ぼす關係に就ての研究（完了）
　鹿兒島蠶試　山元顯義

施肥料を異にせる桑葉と蠶兒發育との關係試驗（研究中）
　高知蠶試　大山末樹

肥料種類を異にせる桑葉と蠶兒發育との關係試驗（研究中）
　高知蠶試　大山末樹

桑に對する施肥時期試驗（便用時期別）（完了）
　高知蠶試　大山末樹

桑樹品種の比較試驗）（完了）
　高知蠶試　秋月育雄

桑に對する肥料三要素適量試驗（完了）
　高知蠶試　秋月育雄

桑に對する施肥容量試驗（完了）
　高知蠶試　秋月育雄

肥料の種類が桑樹の發育に及ぼす影響に就て（研究中）
　德島蠶試　島津勘助

桑の施肥料に關する試驗（研究中）
　島取蠶試　井川清市

主肥料を異にすること並肥料の種類を異にすることに依り桑樹の發育、育蠶上に及ぼす關係（研究中）
　奈良蠶試　岸本新一

肥料用量及時期に關する研究（研究中）
　三重蠶試　河合文太郎

桑樹補助肥料試驗（完了）
　山梨蠶試　山形佳兒

肥培を異にせる桑葉の壯蠶飼料としての化學的成分の比較研究及其の春蠶飼育結果の蠶兒成績收繭量、生糸に及ぼす影響試驗（研究中）
　籏野陸郎

桑葉の摘株回數が桑樹の發育に及ぼす關係調查（研究中）
　岸本新一

郡是製糸、理研　田代茂

桑園間作としての綠肥用作物の栽培法に關する研究（完了）
　鹿兒島蠶試　山元顯義

根刈仕立に於て植付の深淺が桑樹の發育に及ぼす關係試驗（研究中）
　奈良蠶試　齋藤勇助

其の他に及ぼす關係試驗（研究中）
　東京蠶試　齋藤勇助